

田村義也『のの字ものがたり』朝日新聞社,1996年

同 『ゆの字ものがたり』新宿書房,2007年

現代まちづくり塾 越 文明

田村義也(1923 - 2003)は明の兄で、旧約聖書のヨシヤ記から命名された。関東大震災の年に生まれ、第二次大戦に従軍した経験をもつ。大学で経済学を学んだ後、岩波書店で書籍の編集に携わり、雑誌『世界』『文学』の編集長などを務めた。装丁者としても活躍し、大学のデザイン科講師も27年間務めた。著名なジャーナリストである本多勝一に「まさに空前と言える天才装丁家」と評された。



編集者・装丁作家として縁の下の力持ちを自負した著者であったが、自著による単行本を2冊刊行している。『のの字ものがたり』は、TBSの『調査情報』に連載した装丁に関するエッセーを取りまとめたものである。続編にあたる『ゆの字ものがたり』は、著者が様々なところ



で発表したエッセー・編集後記等の発言を収集したものだが、生前の企画を没後に久美子夫人や知人が完成させたという経緯がある。装丁に限らず社会問題など広範に思索を広げており、『世界』の編集後記は特に興味深い。同誌編集長時の1970年前後はイデオロギー対立が激しく、安保・三島由紀夫・ベトナム戦争などの記事に係る世間の反応には相当な苦勞を要したと察せられる。なお『のの字ものがたり』は、田村明が「市民政府」から「市民の政府」に術語を移行しつつある期間に発行されたが、「の」の関係についてはわからない。

両著作は、雰囲気のある場所で一杯やりながらお読みいただきたいので、内容について詳しくは述べない。代わりに両エッセー集に搭載されていないもの、本人が司会などで参加したもの及び田村義也論・評を確認できる限りで以下に整理した。田村義也研究に活用されたい。

なお義也の装丁に関してさらに詳しく知ってほしいので、田村義也追悼集刊行会編・発行『田村義也：編集現場115人の回想』(2003年)及び『背文字が呼んでいる：編集装丁家田村義也の仕事』(武蔵野美大美術資料図書館、2008年)をぜひご一読願いたい。

○自著

「編集者の装丁」『潮』1982年8月号

〈編集もまた現場なのであって、著者のことも本の内容もよく知っている現場の編集者こそが、それにふさわしい衣裳を着せることが出来るはずなのだが……。〉

「“背”こそ本の顔」『週刊文春』1987年11月12日号

「日本語と「闘った」人びと—『日本語大博物館』を読む—」『本の窓』1994年5月号



「装丁とわたし」『週刊読書人』1976年3月29日

〈失敗したなア、と嘆息が洩れる、口惜しさ、慚鬼 - それを免れる作品などほとんどない。とくに自分の書きたいやらしい線、いやらしい筆癖 - そいつが眼の中にとびこんでくるときだ。だが言訳は無用。著者と編集者と出版社とに、ああ、ごめんなさい！その失敗が、紛れもなく、次のステップになっていく。〉



○インタビュー、対談等

「対談『僕の昭和史』を終えて」『本』1988年7・8月号 ※安岡章太郎との対談（安岡編『対談・僕の昭和史』〈講談社，1989年〉収録）

「〈対談〉酒をのむ・水をのむ」『酒文化研究』2，1992年 ※石毛直道・浅井昭吾対談の司会

「〈対談〉灘の酒と江戸の味」『酒文化研究』3，1993年 ※新保博と柚木學の対談の司会

「〈対談〉江戸の酒事情」『酒文化研究』4，1994年 ※芳賀登と吉原健一郎の対談の司会

「〈対談〉縄文に酒はあったか」『酒文化研究』5 ※石毛直道、小泉武夫、吉田集而の対談司会

「『岩波文化』と写真メディア」※インタビュー『朝日ジャーナル』1982.12.24・31号

○田村義也論・評

曾根大吉「金石範「詐欺師」」『週刊読書人』1974年8月12日

「多彩なファンが励ます会 田村義也装幀展」（朝日新聞1980年2月6日夕刊）

「創芸メモ」『暮しの創造』春・第12号（1980年3月1日）

〈田村氏の装幀本には、箱やカバーを取り去ってもその本独自の「顔」が残るのが特徴です。・・・著者に寄せる敬愛と共感が内容と渾然一体した見事な意匠に結実しているのが、田村氏の装幀者としてのセンスなら、裸の本に「顔」を残すのは、本の行末を知る編集者の親切さとも言えるでしょうか。そしてその「顔」は時代を刻した顔でもあります。〉

外岡宏「パーティ開催の経緯」，安岡章太郎・金達寿・宮本憲一・安田武・土井庄一郎・松島秀三・太田昌秀・矢野直雄「祝辞」，岡部伊都子・鶴見俊輔・色川大吉・樋口敬二・森崎和

江・日高六郎・鎌田慧・大江健三郎「メッセージ」，上田

正昭・李哲・野呂重雄・小林金三「祝電」，田村義也・田

村忠子・田村久美子「謝辞」，後藤直「『田村義也』装幀展

をみて」『くじゃく亭通信』第27号（1980年4月10日）

田中薫「私の好きな装幀家」『本と装幀』沖積舎，2000年

〈ある時授業で装幀論について語って田村作品を回覧したら、しばらくして「先生、最近私、田村義也の作品だとわかるようになりました」と、あるゼミ生が言ってきたことがわかる。このようにまさに、誰がみても一目でわかる著しい特徴を持っているのである。〉



坪内祐三「BOOK REVIEW 雑誌系(57) 田村義也さんに装丁してもらいたかった一冊の本」『論座』2004年3月号

田村明『東京っ子の原風景』公人社，2009年

米田鋼路『本に拠る1 ジャーナリズム考』凱風社，2010年

「私の思想の根底には、在日・沖縄・部落の問題がある」
- ある編集者は、田村からこのことばを聞いた。・・・戦後という時代にあつて、近代日本が体現してしまったネガティブな側面を抉り出し、戦争と差別、日本人のありようを問いながら開かれた社会を築こうとする思想営為は、これらの問題を抜きにはありえなかった。そこでは書物が、時代を切り拓く重要な役割をはたしてきた。田村の装幀は、そんな思想営為によって生み出された作品においてこそ、もっとも生彩にとみ、かつ創造的に、その生命を発露させたように思われる。」



雪朱里（大貫伸樹監修）『描き文字のデザイン』グラフィック社，2017年

田村千尋「A Family History by Chihiro Tamura 田村家家族史（英語版）母親・忠幸・義也・千尋」
「田村家家族史」，田村明「田村義也の履歴書」（本研究会 HP）

☆☆☆☆☆

義也は、ほろ酔い気分で浮世について蘊蓄を傾けながら、時には出征時の実体験による戦争への憎しみにも話が及ぶ（明や千尋とここが違う）。田村家の人々は、容貌は春風駘蕩だが生き方は秋霜烈日である。そして家族それぞれに独自の宇宙があり、それらが円環として統一されている。



【蛇足】分子化学でみる田村家 ※千尋博士の反論は？

〈幸太郎〉 O₃ オゾン：酸素原子が一つ多く、接触者に酸素を吹き込み化学変化を起こす。

〈忠子〉 結合電子 e⁻：一家の高分子結合を構成する各分子内の強固なかすがいである。なお一家の太陽であるとの説から、He（ヘリウム。ギリシャ語の helios 太陽）も考えられる。

〈忠幸〉 （情報不足のため今後の課題とする）

〈義也〉 Cu 銅：銅がさまざまな金属との組み合わせで多くの合金をつくりあげるように、さまざまな人物との組み合わせで著作物をつくりあげる。

〈明〉 NaCl 塩化ナトリウム：爆発的な精神的化学反応により生成された、生命に必須の成分である。

〈千尋〉 H₂O 水：個性豊かな家族のエキスをすべて受け入れて長きに渡り流れる。

©レイアウト&デザイン by 川崎洋子